

「小学生白書」を公表

～子どもたちの小さな変化を探る～

子どもに「将来役に立つと思う教科は？」と質問して「ない」と答えられたら、
複雑な気持ちになる関係諸氏も多いのではないか。

これは、学研教育総合研究所が毎年調査を行い、
「小学生白書」としてWebで公開している調査結果の一つだ。

このデータの詳細について説明する前に、
「小学生白書」について紹介させていただく。

【調査概要】

調査対象：全国の小学校1～6年生とその保護者1,200人

調査期間：2022年9月2日（金）～9月6日（火）

調査方法：インターネット調査

かつて発行していた「〇年の学習」の読者対象アンケートはがき調査がその原点。これを受け継ぎ、広く子どもたちのありのままの姿を知ろう、ということが続いているのが「小学生白書」。調査を始めてから40年以上、時代時代の子どもの姿を映し続けてきた。調査はほぼ毎年行う小学生の調査のほか、数年おきに「幼児」「中学生」「高校生」の調査も行い、小学生同様、「白書」として公開している。

「学習」、「生活」などの各ジャンルから、例えば、「お年玉」「好きな教科・嫌いな教科」「読書」「好きな食べ物・嫌いな食べ物」のような定番の質問のほか、「コロナ禍での家族との過ごし方」「GIGA端末の利用状況」など、近年のトピックスを加え、Webによる質問調査を行っている。

長年の調査で見えてくる子どもたちの姿とは？ 今回の調査でも劇的な変化はないものの、社会状況と合わせて、もしくは子どもを取り巻く環境の変化に伴って、微細な部分で変化している様子が見えてきた。

■好きな教科・将来役に立つと思う教科は？

まずは、大きな変化がないものから。「好きな教科・嫌いな教科」は全体の傾向も、男女による傾向も大きく変わっていない。「一番好きな教科」に選ばれているのは、10

年連続で「算数」。続いて「体育（保健体育）」、「図画工作」、「国語」、そして「好きな教科はない」の順。

逆に「一番嫌いな教科」は、「嫌いな教科はない」を除いて、「算数」、「国語」、「体育」、「道徳」の順となった。「嫌いな教科はない」が28・6%なのは頼もしい。「算数」「体育」「国語」の3教科については、「好き・嫌い」それぞれで上位に入っている。

また、「将来役に立つ」と思っている教科は、「算数」「国語」「外国語」。順位、傾向とも、ここ3年の調査結果と大きな変化はなく、上位3教科で全体の70・2%を占めている。一方、「役に立つ教科はない」という回答は、2021年6・0%から8・3%と2・3ポイント上昇。各学年とも上昇しているが、特に6年生で、5・5%から10・0%と4・5ポイントも上昇しているのが気になる。

我々大人世代が「勉強はなんの役に立つのか」という問いに答えてこなかったのではなか、と深く自省した数値であった。

次に、好きな教科・嫌いな教科上位の算数、国語を男女比較で見ると、「算数好き」は男子が30・3%、女子が14・7%と大きな差があり、この傾向は小学校1年生から6年生まで変わらない。「算数嫌い」は、男子14・5%、女子34・2%。こちらも学年を通して

同様の傾向になった。

「国語好き」は、算数とまったく逆の傾向で、男子8・8%、女子18・7%、「国語嫌い」は、男子27・8%、女子10・7%となっている。この構図は、1999年の調査以来続く傾向である。

ただし、「好き嫌い」を、「将来役に立つと思う教科」というアンケートで教科ごとに男女差を見てみると、ぐっと小さくなり、算数で男子33・7%、女子25・0%で8・7ポイント

ント差、国語で男子23・7%、女子25・2%で1・5ポイント差になる。算数、国語ともに好き嫌いに関係なく必要な教科として認識されていることがわかる。

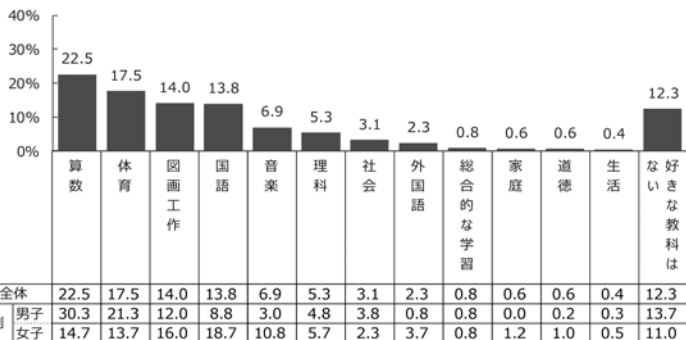
近年、男女での脳の発達プロセスの違いなどの研究が進んでいる。総研としては、この長年の傾向を「男子は算数好き・女子は算数嫌い」、女子は理系に向かないといったステレオタイプな認識で捉えるのではなく、発達に合わせた学び方の工夫につながるような提

言や発信をしていきたい。

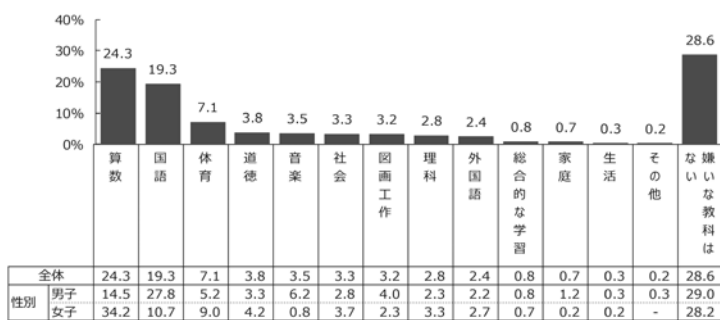
「外国語」は、役に立つと思う教科として算数、国語の次にあがっているが、男女とも「好き」「嫌い」で順位が低く、「好き」男子8位、女子7位、「嫌い」男子9位、女子8位で、男女とも「好き」でも「嫌い」でもないが「役には立つ」と考えていることがわかる。導入当初は子どもたちも期待のほうが大きかったのではないかと。「教科」となった今、小学生時代の受け止め方が、今後の語学習得により影響を及ぼせるよう期待したい。

「体育」は、好きが男子21・3%、女子13・7%、嫌い男子5・2%、女子9・0%と男女の違いが顕著だ。学年別では、男子が3年(22・0%)、4年(23・0%)、5年(28・0%)で好きな割合が高く、女子は、嫌いが4年(18・0%)、5年(10・0%)と一番高い。

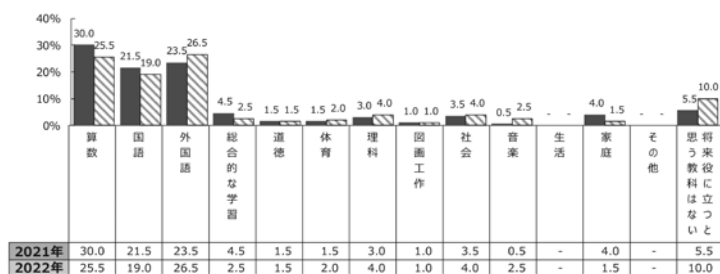
「図工好き」は、全体順位は3位だが、学年が上がるにつれて、「好き」の割合が減ってくるのが特徴的で、1、2年の平均19・8%が、5、6年の平均7・3%と半分以下まで減ってしまう。「嫌い」の割合は学年によって大きな変化がないので、内容・カリキュラムと興味の対象が変わっていくことなのだろうか。



2022年好きな教科



2022年嫌いな教科



2022年・2021年役に立つと思う教科

	2022年		1995年	
	女子	男子	女子	男子
1位	パティシエ	YouTuber	保育士・幼稚園教諭	プロサッカー選手
2位	保育士・幼稚園教諭	プロサッカー選手	小・中・高の先生	プロ野球選手
3位	医師	警察官	看護師	サラリーマン

2022年・1995年将来つきたい職業トップ3 (小学生)

■小学生の将来つきたい職業トップ3

近年さまざまな場面で報じられることも多いのが「将来つきたい職業」である。

将来つきたい職業・女子の1〜3位は、パティシエ、保育士・幼稚園教諭、医師。男子は、YouTuberなどのネット配信者、プロサッカー選手、警察官となった。

YouTuberが登場したのは、2015年の調査からで、「その他」の自由記述欄に登場した。

2021年調査と比較すると、全体順位は2位で変わらないものの、その割合が3・4%から4・2%に増えている。これは男女共通して人気の職業だが、特に男子では全体ランキングで1位となっている。また、2021年には20位以内にランクインしなかった「歌手・アイドル」が2022年では9位に登場している。これは、女子のみでランクインしている職業で、女子の全体ランキングで6位となっている。

一方で「研究者」が順位

を下げた点も見逃せない。2020年では8位だったが、2022年は15位となった。同じく、日本の教育を支える職業である「教師」も2017年の5位から2022年は20位となった。

こうした知的活動や学問・教育を支える職業への憧れが薄れているということは、子どもたちの「学び」への関心度にも影響しているのではないかと、という危機感を感じる結果となった。研究者や教師の働き方などがメディアに取り上げられる機会も増えたが、やはり将来なりたい職業の上位にいてほしい。

そして、2022年は保護者に対して「親が子どもについてほしい職業」の調査も行ったが「特でない」という回答が1位で、子どもの希望を尊重する親が多いと推測される。少し引いた視点で、親世代が子どもの頃の1995年で見ると、女子の1〜3位は、保育士・幼稚園教諭、小・中・高校教師、看護師。男子はプロサッカー選手、プロ野球選手、サラリーマンだった。1993年にJリーグがスタートし、サッカー人気がプロ野球人気を上回った頃であった。親の職業観も変わってきているのではないだろうか。

■月の読書量は調査史上最低冊数を更新、平均2・8冊/月に

2014年調査以降、ほぼ毎年減少してい

る月の読書量だが、今回も最低冊数を更新。月の平均読書量は2・8冊、1冊も「読まない」割合は31・6%と調査史上初の30%超えとなり、全体の読書量の低減が明らかになった。

■学校でのタブレット・PC使用状況

学校現場でのGIGAスクール端末の使用状況について調べたところ、使用頻度の違いはあるが、「支給されていて使っている」と答えたのは全体の77%、さらに全体の約40%が端末の持ち帰りを行っている」と回答した。しかし、「支給されていない」という回答も12%あった。気になるのは、我が子の使用状況について保護者が「わからない」との回答が5・5%あったこと。

学びの環境がさまざまに変化し始めてきた。学研教育総研では、今後も子どもの姿を見つめ続け発信していきたい。

●その他の調査項目

起床・就寝時刻、ペット、自分が好きか、通信機器の利用多寡、習い事、ワーク・ドリル、電子書籍について、身につけさせたいこと、など各30問程度。



「小学生白書」(2022年9月調査)
<https://www.gakken.co.jp/kyouikusunen/whitepaper/202209/index.html>